

## 雜 錄

### 第卅二回日本外科學會評議員會傍聽記

天 馳 使

日本外科學會の評議員會は例年の通り學會の前夜即ち 3月31日の夕方から開催された、出席者は 8,90人で極めて盛會であつた、議事は凡そ次の4項が主なるものであつた。

#### 1. 次回開催地の件

次回開催地に就いては内科が外科と無交渉で既に名古屋市に決定したと云ふのでそれに追従し度くないと云ふ様な所から妙に議論が出て、或は北海道に、或は新潟に、或は京都にと云ふ説が出た。殊に北海道説に向つては地元の柳教授、秦博士からも交々勧誘談があつた。併し土地が餘り遠隔であるため議容易に決定せず、名古屋の齋藤教授の如きは「先づ次回の會長をきめてからそれに従つて開會地をきめたらどうか」と言ふ様な説をも出された。

それで鳥潟教授は事面倒と觀じたか次の如く述べられた。曰く『獨逸にては毎年「ランゲンベックハウス」で外科學會が開かれることに定つて居る様に我國でもいつそのこと今後原則的に毎年東京で開くことにして、やがては「ランゲンベックハウス」に匹敵したものを東京に建設するようにはどうか、毎年一度位全國の外科醫が東京に集りてもわるくはあるまい。遊山氣分で開會地を彼方此方へと持ち廻ることを止めて、學會から全然そんな氣分を除く様にした方がよいと思ふ』と。そこで關口教授がすかさず「それなら來年から早速其の遊山氣分を止めては如何」。鳥潟教授「大賛成」。そこに三宅教授も將來に於て日本外科學會館の建設を賛成された、そこで茂木會長は東京市説を會員に問ひ多數を以て明年の開催地は東京市に決定された、これで先づ明年以後の開催地も原則的に東京市と云ふことになつた譯である。開會地が北海道とか、九州とか、新潟とか、名古屋とかでなければ其の土地の外科醫は一生一代會長になれぬと限つた譯でもないから、開會地が東京でも心配御無用と申すべきである。否、却て其方が會長の決定にもうるさいことがないであらう。

#### 2. 次回會長の豫選。

選舉の結果東北帝國大學關口蕃樹教授多數で當選された、次點は九州帝國大學の後藤教授、赤岩教授の順序であつた。

會長になつたからとてそれがなにも名譽と考ふべき程のものでもない、また會長は單な

る飾物でもない、眞實に學會を支配し指導して行くべき實力を持つた人物であるべきであるから必然的に現任大學教授（帝大でも單科大學でも）又はそれに匹敵するもの（陸海軍醫學校の教官）の中から選定すべきである。學術最高の府たる大學又は教室を退いた人はどうしても日進月歩の學術から遠ざかるものと見ねばならぬから此の様な元老連の中から會長を押し立てようとする事は今後は見合せの方がよからう。強て會長にしなくても此等の人々に敬意を表する方法はまだ澤山ある。元老連も亦會長などを辭退するがよい。

### 3. 次回宿題の件

茂木會長の報告する所によれば『次回に宿題報告をさせて呉れ』と云つて次の様な人々が次の様な題で早くから既に會長に申込んで居つたとのことである。即ち 1. 喘息（北海大學柳教授） 2. 食道外科（千葉醫大瀨尾教授）がそれで、會場で自薦したのに京城小川教授の腸閉塞があつた。

これは實に驚き入つた事共である。従來は『宿題報告をさせて呉れ』と云つて評議員會を開く前から豫め會長に私的の申込をして置く様な人は皆無であつた。従來では評議員會の席上で會長が「次回の宿題に就いて御意見を承り度い」と述べると「A氏は何を研究して居つて大分研究も進んで居る様に見えるからそれを宿題にしたらどうか」、「B氏は多年何をやつて居るがそれをやつてもらつたらどうか」と言ふ様な風に評議員中の第三者から理由をつけて推薦する。さうするとA氏やB氏は互に未熟の故を以て譲り合つたものである。其中に元老連の2,3が「明年は兎に角A氏に御願ひしてはどうか」と言ふ様なことから會長が更に全體に賛成を求めると言ふ様な形式で宿題が決定したものである。今回の様に開會前から吾勝ちにそして私的に會長まで前以て宿題報告をさせて呉れと曰ふ様な申込みなどをした者はなかつた。晩近の世態人情が此の様なことにまで反映するに至つたか。さてもさても。天馳使などは此の下界の有様に慄然として肌の寒きを覺えた。

柳教授の喘息、小川教授の腸閉塞などに就ては従來の研究發表から推して宿題報告者として發言の權利は多少ある、併しそれにしても自分自身の口から述べたり或は前以て私的に會長へ宿題報告などを申込んで置くべき筋合ではあるまい。東大鹽田教授の所でも腸閉塞のことを研究して居るし、京大の伊藤教授の所でも喘息の外科的療法を研究して居る、此等は周知のことである、併し此等の教室からは宿題報告をしたいと言ふ様な申込は前以てして居らぬ。

もしそれ瀨尾教授の食道外科に至りては従來何らの研究あるを聞かずまた發表も無い。之に反し京大外科では1925年以降平厩開胸術に關聯して食道外科に就て臨床例の發表が日本ばかりでなく外國文献にも出されて居ることは知れ渡つて居る筈である、併し前以て私

的に會長へ申込んで宿題報告をさせて呉れと言ふ様な厚かましい態度は決して取つて居らぬ。

此時鳥瀉教授は『食道外科の問題に就ては京都の教室でも數年前から多少づゝやつて居りますが向ふ一ケ年では材料が不十分かと考へられますから明後年の外科學會の宿題として本年から決定して置いては如何ですか』との説を出されたが、それに對し瀨尾教授は何か激昂した様な口調で『明年でも何がわるいか、明年だけのことをやればよいではないか』と述べられた。鳥瀉教授は之に對し沈黙された。

評議員は 8,90 名も集つて居つたらしいが熱心に宿題を選定する様な學術的氣分を示さず一切次回會長に一任すると言ふことで次の議事に移つた、こんなことなら評議員は何人居つても木像よりも悪い。

附記。開會第 2 日になつて次回會長が關口教授に定まり、關口教授から鳥瀉教授に向つて『食道外科の宿題を明年の學會で京都の教室でも受持つて貰はれぬか』との相談があり其の結果明年の宿題及び擔當者は次の如く決定した。

- |            |     |           |
|------------|-----|-----------|
| 1、喘息の外科的療法 | 報告者 | 柳 教授      |
| 1、食道外科     | }   | 報告者 瀨尾教授  |
|            |     | 報告者 大澤助教授 |

今度のことに鑑み明年以後は『宿題の選定』には次の様な點を考慮せねばなるまい。

第 1。宿題報告希望者或は宿題報告の推薦を評議員會開催以前に豫め募集すると言ふ方針を探るならば其旨を會長から前以て評議員一般へ通告すること。

第 2。第 1 の方針で無いならば會長は私的の交渉などには耳を借さず評議員會の席上に於て始めて宿題の申込みなり或は推薦なりを受け付けその詮衡を即時評議員會に附すべきこと。

第 3。評議員會は宿題の豫選をもすこし慎重に取扱ふべきこと。即ち會長の選舉と共に宿題をも投票で決すべきこと。

第 4。宿題報告者は其の宿題に就ては從來既に多少の研究發表を爲し居る者たる可し。

今までそれに就て何等の研究をも發表せざりし者をいきなり宿題擔當の資格ある者と爲すべからず。

これは學術を尊重する學會の當然の義務であらう。『私に此の宿題を報告させて下さい』と懇願して來さへすれば從來何等の研究も報告もして居らぬ誰彼れをでも採用し、そして一方には多年その問題を研究して既に一定の報告を出して居る者を全く不問にするか或はそれを後廻しにする様なことは學術及び學者を敬重する所以ではあるまい。

第 5。一つの宿題の擔當報告者は唯 1 人たるべきこと。

これも亦充分慎重に考慮されねばならぬ問題である、同じ宿題で同じ方面で同時に2人、3人の擔當者があつては臨床的材料の集め方や取扱い方で報告者共は非常な苦勞をせねばならぬことがある、それが結局落ち着いた靜かな研究發表を阻害することになるであらう。

附記。此の記事を認めるより以前4月11日の日附で『小生事「食道外科」を擔當致すことに相成候に就ては此際患者を送つて呉れ』と言ふ様な依頼狀が既に瀨尾教授から全國津々浦々へ發送された様である。それに對しては『當方でも食道外科』の宿題を擔當して居るから此際患者を送つて下さい』と京大の教室でも依頼狀を出さねばなるまい。また其他の方法で『京大の教室では數年來から「食道外科」に着手して多少の成績を収めて居る』と言ふ様なことを江湖に知らせて患者を送つて貰ふ上の信用を高めねばなるまい、そうすると他方でも亦た何かの對策を講ずることになるであらう。つまり。一種の本家争ひの様なことになる。此の様なことが學術の健全なる發達の爲に果して良き事であるかどうか大に疑問であらふ。

#### 4. 三宅名譽教授獎學資金の件

三宅名譽教授が外科學會へ寄附された獎學金一萬圓の利子を如何にすべきかと言ふことである、此件に就ては豫め茂木會長から一つの試みとして過去一ヶ年内に於ける日本外科學會雜誌所載の論文中優秀なもの三編を選びこれに賞金として呈すると言ふ案を評議員會全體へ通知しあつたがそれが實際は實行難に陥り選定の當不當は別として、とにかく推薦して來たものが評議員の3分の1にも達せぬ位であつたといふことである。それで茂木會長は此の事情を陳べて評議員に「此の金を如何にすればよきか」を尋ねた。その時京大伊藤教授『私の考へでは優秀(?)論文に授賞することよりも宿題擔當者へ研究費の一部として前以て進呈するがよいと思ひます』と述べられた、「それがよかろう」との聲も2,3聞えた、茂木會長は九大の後藤、赤岩兩教授の意見を求めた「矢張りそれがよかろう」とのことである。今度は會長が鳥瀉教授を指名して意見を求めた。鳥瀉教授曰く『一體優秀論文に授賞すると言ふことなどは小供らしくて愚なことである、伊藤教授の説の様に宿題擔當者の研究費の一部として進呈するのが一番有効な獎學方法かと考へます』。併し評議員の元老株の中には『これを受けるのは非常に名譽なことであるから嚴肅な儀式で授賞した方がよい、從て研究費の一部として前以て與へず宿題が濟んだ時に其場で與へたがよい』と言ふ人もあつた。結局それに決定して本年の宿題報告者から實行することになつた。

優秀論文へ授賞すると言ふことは内科學會や其他の學會でも隨分と彼方此方でやつて居ることではあるが併し審委員がどんなに忍らくても優秀な論文などはそんなに容易に判斷され得るものではない。それで大抵は授賞を東西南北四方八方へ一年毎に撒ら播くと言ふ

様な至極俗なことになり勝ちのものである。日本外科學會の先覺者が此の點を見抜いて後れ走せなる月並的の授賞沙汰を斷然思ひ止まり『學會の爲に宿題を報告する人』に贈呈してそれで獎學の目的を達すると言ふ新機軸を建てたことは流石に時務を知るの俊傑を網羅して居る日本外科學會であると申さねばなるまい。併し宿題報告を濟ませた際に、其時に『御褒美として下さる』と言ふ様な形式では其の金は學術研究の爲に使用されるよりも多分慰勞金とか、宴會とかに使用されるのではないかと懸念される、それであるから眞に學術研究の爲に此の金を一錢と雖有用に使用させるためには宿題擔當者に前以て贈呈する方がよいと思ふ、老人連は兎角授賞だとか、大名譽だとか、凡て俗世間的に學術及び學者を取扱ひたがる癖があるけれども、それは高々中學生迄位を教育する場合の仕方であつて、決して眞の學者を待遇する所以ではない、明年からは此の獎學金を宿題報告者へ研究費の一部として前以て贈呈することにした方がよからう。

これで重要な議事が濟んだが茂木會長は本年は特別講演として近藤名譽教授に『本邦に於ける外科學發達の回顧』と言ふ題で願ひしてあつたが御病氣であるので田代名譽教授が代つて講演されることになつたと報告するや鳥瀉教授は『此の様な歴史的の回顧談は興味深いもので自分も是非聽聞したいと思つて居る 1人であるが併し問題そのものの性質から申せば日本外科學會の特別講演として採用すべき限りではあるまい。吾々が先年來各教室からの出題を一か二つに限定して且つきりつめた時間で演説させて居るのは何の爲であるか、それは原著研究(「オリジナル」)の發表及び十分なる討論の爲である。其の様に貴重な時間を「嘖嘖の様な閑談」でつぶすのは學會の方針に一致せぬ様である。今度だけは仕方がないが今後此の様なことを繰り返さぬ様にせねばなるまい』との注意があつた。之に對して名古屋の齋藤教授は『歴史を知らねば眞の發達は出來難い云々』と説かれた。併し之は見當違ひの討論であつた、鳥瀉教授は『此の様な講演は無用だ』と述べられたのではなく『日本外科學會の特別講演として取扱ふべき程のものでは無い』と述べられたのであつた。此の様な別種類の御話しは文章で讀んでも講談の様に面白く讀めるものである。

それから最後に評議員の数が百名とあるのをもつと増したらどうかと云ふ相談が會長から持ち出されたが賛成者が稀であつた、評議員はむしろ目下の半分位に減じて其代り公平無私に學會の健全なる發達の爲に臆面なく意見を開陳することが評議員の義務であると自覺して居る様な人ばかりを選び出した方がよからうと思ふ、3ヶ年續けて評議員會に缺席すると評議員を止めさせると言ふ評判があるのでなかなか懸命に出席する様ではあるが今後は併し何年續けて出席しても學會の爲になる様な意見を一度も吐露せぬ様な人は評議員からオミットする様にしたらよからうと思ふ。孟子曰く故國とは喬木あるの謂に非ず争臣あるの謂なりと。其通り日本外科學會も 30年以上の歴史あるが故に貴しと爲すべから

す、正義正論を主張する會員の多きを以て誇となすべきである。評議員に列する者よくよく三省して卑屈に陥らず驕慢に走らず學會の爲に誠を竭して以て諫を納るべきである。天馳使は天空から評議員全體の覺醒を叫ぶものである。

## 第卅二回日本外科學會第一日漫評

青 龍 刀

△今年の外科學會は東京帝大の法學部教室で開かれた。少しく廣過ぎた嫌ひはあつたが、明るく落ちついて居て氣持がよかつた。それにつけても獨逸の外科學會に於ける Langenbeck-Virchow-Haus の様な獨立の會場が日本の中心地に建てられて今後の學會は凡て其處で行はれる様になつたらば嘸かし素晴らしい事であらふ。何年かの後には是非これを實現させたいものである。

△會長茂木藏之助教授は三日間終始座長席に在つて徹底的に學會を主宰して居られたが、その勞は大いに感謝さる可きである。會長たるの自覺と能力とのある者は當然斯る行爲に出づ可きである。五六年前までは『何某は三日間寸時も會長席を去らず名譽を獨占した』と言ふ様な意味で門外漢が悪口を言つたものであるが實に今昔の感が起る。

學會を主宰して行く能力の無い者が誤つて會長に推されると得て會長席を他人へ譲りたがるものである併し今後はその様な無責任な者は決して會長には當選すまいと思ふ。尚ほ茂木會長は、追加、討論者の姓名を必ず尋ねて、その返答を得てからで無くては發言を許さなかつたのは誠によい事であつて、此の善い習慣は將來とも持續して行きたいものである。

併しもつとよい事を言ふならば討論追加を希望する人は紙片へ姓名を記載して會の記録掛を経由して會長へ通じて置く方が更によいであらふ。多數の會員の居る坐席の中から彼方でも此方でも鉢合せ的に同時に起立してほととぎすの様に姓名を叫んでも時には會長が見逃す場合もあり得る。

討論追加者が前以て紙片で姓名を通じて置けば會長は第一何回も姓名を聞き直さなくてもよい。第二またそれで發言者の順番もきまる譯である。これは此次の會長の御參考迄に述べて置く。

それから一つ討論者が自席で會長の方へ向つて發言したでは後方に居る會員には聞き取れ難いから矢張り演壇に上つて會員の方へ向つて發言する様にした方がよいと思ふ。さすれば自席に突き立つてデタラメな討論をする人も減するであらふ。

△第一日の演題22、追加5、合計28題から、自分の頭に残つた感じを此處に書いてみ様

と思ふのであるが、貴重なる業績に向つて悪口を申す所存はさらさら無い。妄言多罪は豫め御断り致して置く次第である。外見は蛇の舌に見へるかも知らぬが内心は佛のつもりである。

#### 4. 腰椎麻醉高處適用法の一考案

滿洲醫大平山外科 長岡英夫

昨年の本會席上で大連病院の本村君が同じ様な題目を述べて居たが、本演者のものは脊髓液を多量に20.0㏍採取してそれに「トロバコカイン」を溶解し、それを脊髓腔内に注入する丈で、安全に目的を達すると思ふのであつた。之に對して、多數の人から追加、討論があつたけれども、木村敬義博士は一度に多量を注入せずに2.0㏍宛抜いては入れ、抜いては入れてそれを繰り返へすとだんだん上方迄麻醉が進むから此の方法がより善いと説いたがこれは一理があると思はれる。また腸管麻痺を伴ふて居る際の開腹術にはこの方法を用ゐる方がよいかも知れない。何となれば、高位腰椎麻醉が、腸管蠕動を促進せしむるに大いに役立つ事は京都府大横田教授門下の仕事でも明かであるからである。

#### 5. 創傷治癒機轉に関する生物學的考察

北大柳外科 奥田義正

創傷治癒速力を數學的に表はし、創傷治癒に及ぼす各種食物の影響を研究したものである。脂肪の多い食物を攝取すると創の治りがわるいと言ふ民間の説を立證せんとした所などは一寸思ひつきである。創傷治癒経過を數學式で出した事は演者の創意ではなく、可成り古くからあるのであるが、京大藤浪君の追加にもあつた様に、同君も演者と略々同様の式を得て、既に昨年日本外科寶函猪子名譽教授古稀祝賀記念號に發表して居る。Carrel, Dehellyなどは(1917年)此の創面治癒の曲線中に於て水平部を示して居らなかつたが1921年には Carrel はそれを Latenzstadium と稱して居る。藤浪君も明白にそれを認識して居る。そして其の原因を『エピテル細胞の免疫獲得に必要な期間である』と説明して居る。従て創面に更に高度の感染が発生すると此の水平部(創面治癒の停滯即ち潜伏期)が再三出現する或は全身乃至局所の營養に異状を來しても此の水平部がまた出現すると説いて居る。

奥田君もまた藤浪君が記載した如き水平部を認めて居るが藤浪君の質問に對しては其の發生の意義を少しも免疫學的に認識して居らぬ様であつた。併し實を口ふと化膿に暴露されて居る開放創が何故に表皮細胞の新生で次第に治癒して行とかとの考察に對しては是非共「免疫」を不問にする譯には行かぬ。全身營養不良などの他の原因の無い普通の場合の表皮新生機轉の経過中に於ける此の水平部は即ち表皮細胞の免疫獲得に要する期間であるといふ藤浪君の説明は面白いと思ふ。

創面治癒経過を今後立體的立場から算出する方法を速く生み出したいものである。

某氏が創傷治癒力の遅速と  $P_H$  を云々されて居たが、此處で一考したい事は、治癒力の善悪が果してその創傷肉芽の  $P_H$  の變化に原因するのか、或は  $P_H$  の變化はその治癒機轉の善悪の結果であるかを明にしなければならぬ事である。煙突の煙が西に流れて居るのは、東から風が吹いて居る爲であつて、決して煙が西に流れた結果、風が東から吹き出したのでは無いのである。尤も結果が更に原因になる場合も無いではないが併し大抵の場合には原因と結果との錯誤、前と後、左と右との順序の錯語をせぬ様にせねばならぬ。それを確にせぬと診断、治療等が飛んでもない事になる。

例へば  $P_H$  を變へれば創傷は治るとか、石灰分をやれば結核が治るとか鹽酸を與へれば胃痛が治るとか言ふ事になる。とどのつまりは測候所の屋根へ上つて矢を東へ向ければ風が東へ吸くといふ様な事を主張する様にもなるであらう。因果關係をごちやごちやにして居る向ふ見ずの研究者は大に注意すべきである。

#### 6. 追加、或種の粉末重湯と從來の重湯との營養價比較に就て

慶大外科 百溪定七郎

手術後特に胃腸の手術後病人に用ふる食物に就いては、頭を悩しながらも、慢然と從來の非學術的な食物を使用して來て居るものが可成りに多いことと思ふ。然るに演者等は此の點に意を用て、各種の食物を造り、種々比較の結果、特殊の重湯を造りあけて優良の効果を得た。これは誠に臨床上有益な報告であつた。筆者は、外科畑に於て營養の研究がもつともつと討究されなければならないと多年考へてゐるものである。つまらぬと思はれる事の中に大切な事が含まれてゐるものであるから重湯の事位として輕んずる人があるとすればそれは不心得者である新しい研究は俗人の所謂大小(?)の區別なく尊重すべきものである。

#### 12. 進行性淋巴肉芽腫の病原に就て

岡山醫大泉外科 橋本 享

興味ある臨床上の一例報告であるが京大畚野君も此によく似た臨床例を追加した。同君のものはグラム陽性の雙球菌に依るものであつたが、尙ほ詳しい細菌學的検査の發表をほしい。

#### 15. 食道下部及び噴門部癌の人工氣腹法によるレントゲン診断

千葉醫大瀬尾外科 中澤美志郎

演者等は同氣腹法に由るレントゲン像に基いて、食道下部及び噴門部の位置、浸潤の程度周圍臟器との關係を知り、それに依つて開腹か開胸か何れから行くかを定めんとしたのである。人工氣腹法を用いた事は何も珍しい事でないが之を胃、食道部に用いたのは洵に



よい思ひつきである。然し、此の際大澤助教授の追加した平壓開腹開胸術に依つて該部に達する手術こそ記憶さる可きである。演者等の法に依り、胸部或は腹部の何れかを先に開いたとしても、食道下部腫瘍の摘出に當つては結局胸腹兩腔を同時に同一手術野として開かざるを得まい。大澤助教授と瀬尾教授との間に討論が繰り返されてゐるが、それに関しは後で少しく批評を試みるつもりである。

#### 16. 追加、腎臓水腫の成因に関する研究

熊本醫大萩原外科 盛 彌 壽 男

輸尿管狭窄を種々の程度に遡る自家考案の方法を面白いと思ふた。なほ腎副血行の増加と腎水腫成因との關係を述べて居たが臨床的所見と合すると誠に宜なる結論である。此人は業績のまとめ方がよい人で後來有望な研究家であると思はれた。

#### 特別講演「吾輩の助手時代を語る」

名譽會員 田代 義 徳

本年は會長の案として外科學界の元老に坐談的に一場の昔語りをして貰うのだ。豫定の近藤博士が病氣で田代博士が代つて、そのかみの助手時代の物語りを種々と「ユーモア」を入れながら乳癌切除に就てのスクリーバ先生の手術振りと佐藤三吉先生のそれとを比較したり其他種々な面白いことを語られた。伊勢の國から遡る々とやつて來た患者が大きな風呂敷包を頭へ上せて居るので「マア荷物を下ろしたらどうだ」と言つたら「これが私の病氣です」とあつて正體を見ると巨大な脂肪腫であつたなどは徒然草からでも抜けだして來た様な面白い話であつた。海綿で血を拭つてそれを大瓶でザブザブと洗つてまたすぐ使用した事やらメツヘル類の柄は何れも木製であつたがいつ頃から全部金屬になつたかも知れぬなど取り々に面白い、併し名古屋の齋藤教授の曰はれた様子をそれを知つて置かねば日本外科の今後の進歩が困難な程の事柄では無論ない、全體としては何處から見ても好々爺の一場の茶話しであるのは争はれない。勿論それでよいのである。

その後で、佐藤三吉博士、三宅博士なども登壇されて、消毒薬として「クロールカルク」をも使用した事やら喉頭切除の際にトレンデレンブルグの氣管「カーユール」の周圍を、空氣で膨らせた「ゴム」球で充塞する代りに「ガーゼタンホン」を始めて行つた事やら「ヘルニア」の手術は餘程後になつてからやつた事などを語られたのだが、我々はその昔語りをもつと澤山聞きたかつた。張りつめた學術演説の後に、氣分を和ける意味で確かに聽聞の價値の充分にあるよい思ひ付きである。只元老達が結論として「その當時日本でやつて居たことが、獨逸と異ふ事が殆んど無かつたから、日本外科學の進歩は獨逸に負けて居なかつた」と言ふ事を繰返へし力説して居られたが、獨逸外科の進歩(他人の物)をそつくり其儘日本外科の進歩(我が物)なりと心得て居られるから面白い、齡を重ねるとこの様に自他の區

別が無くなつて他人のものでもみんな自分のものゝ様な氣になるものと見える。當時日本でやつて居たことが凡て日本獨創のものであれば自慢にもならうが、なにかがさて、凡ては獨逸模倣の時代であつたのだ。つまり此の時代は上手にそして早く獨逸外科を眞似んだ(學んだ)と言ふ事だけが非常な自慢自負の種であつたのである。併し我が國に於ける獨逸外科模倣の實況が此等の諸先生によりて眼に見る様に今の若人に示されたことは時に取つての一興であつた。それはそれとして何年後になつたら、何人の口から眞正の日本外科の進歩が回顧される事であらうか。これを思ふと蕪然たらざるを得ぬ。

×            ×            ×  
                 ×            ×            ×

△學會が年一年と盛大になつて行くことは我々會員の大いに喜びとする所である。學會に追加、討論の多いのはその會員の研究慾の旺盛を物語るものであつて、第一日の如きも仲々賑ふたのである。然し追加する人を見て居ると毎年殆んど同じ様な人である事は考へを要する事である。それに、毎年同じ事實を何かと言ひ出しを捕へて追加する人がある様であるが、これなどはその人の學問の進歩の停退を物語る以外の何物でもなく、斯る追加の爲の追加は今後止めた方が良いと思ふ。

△學會は神聖で眞面目でなければならぬのに瀬尾教授の態度には一同もあきれた。大澤助教授が平壓開胸術を述べて追加したのに対して瀬尾教授は一種侮辱的態度で下の如くに述べた、『君等は數年來から平壓開胸術を喋々するがそんな事は自分は既に 20年前にやつて居る、併しそれでは(手眞似をして)縦隔竇動搖が起つてだめである云々』

言ひも言ひたり。よく併し學會の席上で臆面もなく此の様なでたらめが言はれたものである。研究發表に對して相互に敬意を表し合ふといふ様な學者的の態度は微塵もない、全然「ベランメー」式である。一體何といふ醜惡さであるか。丁度惡太郎がニュートンに對して『何でい！林檎の落ちるなんざあオイラ疾くの昔から毎歲見てらあ、併しそれはいつもオイラが棒で叩き落すからだ、重力なんかでんでだめでい』と言ふ様なものである。20年前に平壓開胸術を行つたと言ふ唇の間から引續き縦隔竇の動搖を云々する様では瀬尾教授の行つた平壓開胸術といふのは多分肋骨切除をやりそこなつて肋膜に孔でもあけた技術(?)の事を指したのでもがなあるふ。大學にして此の教授ありむしろ憫殺に値する。

それから同氏が追加した食道癌の手術で「包み込み法」なるものはザウエルブルツフ氏の法に過ぎない。腫瘍が癌であつたか何であつたか證據もなし、切除も出來て居ない様な子供だましの例が幾つあつてもそれは食道外科でも何でもなし。腹の中から胃壁を縫ひ上げてそれで腫瘍が壞疽になつたと稱して居るのだから罪は無い。ともあれ食道下部及乃至噴

門上部の手術が腹腔内からばかりか或は胸腔内ばかりから出来て平壓開胸開腹術は無用と言ふ事が確められたらさぞかし面白い事であらふ。

△当日は三宅將獎學金授與式なるものを舉行する事が「プログラム」中に掲げてあつたが評議員會でそれを變更してしまつたので授與式は行はれなかつた。大體、學問(從て學者)を取り扱ふ事競馬の馬の如く考へ、論文に等級をつけて賞金を與へやうとした試みは無意識であつたとしても實際は學問や學者を侮辱し様とした試みで危い事であつた。蠅や蜘蛛を無用だと罵つた貴公子が却てその御蔭で一命を全うした話もあるではないか。授賞された論文は後年却てつまらぬもので、つまらぬとされた論文の中に却て絶大の眞理が含まれて居ぬとも限らぬものである。外科學會員中の二、三の者が審査委員になつて學者面をして蛆が下等だの蝶が上等だのとあつて授賞沙汰を發表する様な事にでもなつたらばそれこそ神聖なる外科學會の永久の恥晒しであつたであらう。思へば寒心すべき危険な事であつた。此邊で青龍刀は本年は一と先づ鞘に納まる。

## 第卅二回外科學會第二、三日傍聽記

山 法 師

### 23. 腹腔内吸収に就て

東北帝大 關口外科 佐藤義房

從來吾國でも相當廣く研究せられた問題だが、其多くは吸収速度に關するものであつたかと思ふ演者は主に吸収道に就て若干の新知見を得たものである。青山教授も此の問題を研究したことがあるのであるから此様な場合に討論追加をして貰ひたかつた。

### 24. 腹腔内に於ける液體の擴散移動に就ての實驗的研究

京府大 横田外科 藤田登  
櫻井雅四郎

數年前の本會で穿孔性腹膜炎の手術が問題になつたことがある。當時は甲論乙駁であつたが兎に角今日では出来るだけ早期に手術すべしとする人が多い様だ。

此の如き腹膜炎の際に先づ第一温熱と寒冷と何れがよいかといふことだけをでも各方面から進んで研究し確定的の解決を得たら面白い事であらふ。

### 27. 腹腔の局所性自動免疫に關する實驗的研究

熊本醫大 萩原外科 西郷一惠

腹腔内手術後の最煩はしい合併症の一は何と言っても腹膜炎の感染である。此を局所免疫的操作で一定程度まで防止し得るとすれば、其密與する所決して些少でない。演者は其可能なること竝に此目的に向つて「ワクチン」よりも「コクチゲン」が遙に優れて居ることを科學的に立證したものであつた。局所に作用させた免疫元が局所性にはどの様な現象や作用

を示すかをも更に進んで追及したならば面白かるふ。これは今後の研究に待つ。

青柳君は面白い臨床例を追加した。それは食道手術の爲に胸腔腹腔を同時に開いた患者で胸腔だけに連荷混合「コクチゲン」を注入して置た所、術後8日目に不幸にして患者は死亡したが剖検によつて腹腔には著明な腹膜炎が起て居たにも拘らず、従來、特に感染し易いと考へられて居る肋膜には何等感染性の變化を認めなかつたと言ふのである。こんな事實はたゞの1例でも捨て難いものである。

腹膜炎防止の目的で三宅教授が以前に「ヌクレイン」酸を使用された事が發表された。これは矢張り喰菌作用を高めるものである。併し其後の研究發表は絶えて無い様である。

### 28. 急性腹膜炎に對する大腹菌「アンチウイルス」の臨床的應用

岡山醫大 津田外科 津田 誠 次

ベスレドカの提唱による「アンチウイルス」を種々の時期の蟲様突起炎手術に用ひた面白い臨床經驗で、此物質が腸管の蠕動を充進する作用をもつことを證明した昨年報告の繼續と見るべきものであつた。

演者の「アンチウイルス」は陳舊の肉汁培養から菌體を除いてそれを100度で1時間煮沸したものである、如何なる譯でその様に煮沸するのであるか、如何なる譯で生態の液を使用せぬのであるか其の譯を知りたいものである。

此の發表に對し鳥瀉教授は其有効作用が果して「アンチウイルス」と命名された特種の物質に歸すべきであるか否かの據り所を尋ねられた。従來知られた以外の新らしき特種の物質の作用では無いならば「アンチウイルス」と曰ふものゝ提唱は意味を爲さずそれは主として「コクチゲン」の作用に歸すべきものであろう所謂「アンチウイルス」の作用から「コクチゲン」の作用を取り除いたものが眞實の「アンチウイルス」の作用であらふ。今後の研究發表が見物である。

山法師は演者の眞摯な學究的態度をたのもしく思ふ。答論も返答もこれは模範的であつた。

### 30. 手術的糞瘻閉鎖の一新法

慶應大學 木村 博  
藤原 道純

演者等の新法を長い皮下瘻孔を合併せる結腸糞瘻の閉鎖に應用することは或は困難かと思ふが比較的簡單な操作であるから機會ある毎に試むべき方法であらう。此の様なことを考へ出すのは獎勵すべきである。

### 35. 肝機能と胃癌切除術の成績

九州帝大 赤岩外科 谷口 健康  
葛原 輝

胃癌切除の後に何等特別の障礙を證明し得ないにも拘らず著しく體力の恢復が遅延し、

或は時に死亡するものゝある事は筆者も久しく痛感する所で、演者が此の謎の解決に眼を向け、かゝる患者を術前に豫知する一の指標を示したことは誠に敬服の至である。即ち血中の乳酸量が30ミリ瓦%以上の時は肝機能障碍の徴で豫後不良とせらるゝのである。此様な研究結果は各臨床で追試して早く其の價値を決定するがよいと思ふ。日本國內に外科の講座が何程澤山あつても他の業績の追試を怠む様では學術は進歩せぬ。此報告などは今度の學會では實に出色のものと思ふ

### 37. 胃癌切除術式に関する検討

千葉醫大 高橋外科 鈴木 五郎  
中 村 喜重

演者等は單に犬に就て術式を練習したもので患者に就て行つたものではなかつた。従て年來人間に就て手術をして居る経験家から質問をされて返答に困却した様な態であつた。また演者の述べた術式は演者自身が認識すると否とに不拘・既にチャルス、メイヨウが實施したものに過ぎないことは大澤宮城兩君が指摘した通であつて、山法師も既に幾例かの經驗をもつて居る。其後に瀬尾教授が飛び出してメイヨウは併し「ノルマルメートデ」(正規手術)として掲げては居らぬと抗辯された。これは併し問題外である瀬尾氏はよく問題以外に奔逸して詭辯を弄する人である今後注意されたがよかるふ物笑ひになるから。胃癌切除術式の一つの方針は切除の範圍は從來慣行の儘とし、術後の胃内消化を出来るだけ生理的の範圍に(單に時間的にだが)近からしめようとするものであるがそれに對して大澤君は食餌の胃内停滞時間が生理的の云々と云ふことよりも、胃癌切除後の再發が多い事實から觀て、出来るだけ廣汎な範圍の切除に適する如く術式を改良すべしと主張した。

宮城君も亦た食物の胃内停滞時間が生理的に近いからと云つて胃内消化も生理的範圍に近く行はれるとは限らないし、患者の自覺症狀から言へば寧ろ通過の速い方がよいと述べたことは山法師も全然同感である。従て今後は主として可及的大なる範圍に互りて胃を切除すると言ふ方針が胃癌の際に重要視されるであろう。そして其極限は胃全剔出である。

乳癌では何の様に小さなものでも乳腺全部を取り去る、子宮癌でも亦然り。それでも再發がある。然るに舌癌でも胃癌でも其の當該臓器を全部取ると言ふ原則を立てた者は無い。此の様に『外科的に切除する』との方針が癌に向つては劃一ではない。これは實行の難易が伴ふからである。従て胃癌に對する外科的療法の今後の行き方は食物の生理的滯留時間などは問題ではなくて如何にすれば安全に胃全剔出或は亞全剔出が出来るかと言ふ術式の研究に進むべきである。

廣汎な胃切除の後に結腸後部胃腸吻合を行ふ場合結腸間膜の裂隙を如何に仕末するかとの問題が大澤君から提出された。此に對して瀬尾氏は「そんな場合にはすべて結腸前胃腸吻合を行ふから問題でない」と答へた。此などは所謂顧て他を言ふの類で少しも問題の核

心に觸れて居ない。例へて言へば「表の入口が破損したがどう修繕するか」の相談に「裏口から出入するから問題でない」と云ふのと同じである。討論の焦點が何處に在るかといふ事が理解出来ぬ人や、よしそれがわかつて居ても他の事でそれを回避してごまかそうとする人は討論する資格の無い人である、學術的正義心の無い人である。大學教授にして此の如き人あるは遺憾の事である。

横行結腸間膜裂隙を胃後壁へ縫着することが出来さへすれば問題ではないが胃が萎縮して居るとか又は胃を廣く切除したとかの時にはそれは出来ぬ、此の様な場合に後横行結腸胃腸吻合術を行はんとすれば差し當り腸間膜裂隙を如何に處理すべきかが問題になる。日本で今日まで随分と多く胃癌切除を行つた様な外科醫でも此の點を一向に論じて居らぬのは不思議の至りである。獨逸でも注意を拂つて居ぬ様である。瀨尾教授が顧みて他を言つたのも無理からぬ次第である。此點に就ては京都外科は年來注意を拂つて種々な試みをして來たから今に何等かの發表があるであらう。

### 38. 余の胃腸鉗子と胃腸吻合法

千葉醫大 瀨尾外科 瀨尾 貞 信

演者によりて焼き直ほしをされた自動式胃腸縫合鉗子の供覽であつたが惜むらくは此器械を使用した場合の胃腸壁癒合状態の組織學的檢索が行はれて居なかつたので發表は學術的では無い。此次ぎにはそれを示し且つ更に臨床治験例をも示すべきである。

胃の斷端を縫合する場合に從來は一般に全層（筋肉、粘膜）を縫合して居つたのを全廢して術式的に最初粘膜だけを縫合し其後に漿液膜筋層の縫合を行ふべしと言ふのは京都外科の主張で先年の外科學會で詳細に發表された。今度大澤助教授が全層を縫合する瀨尾氏の器械使用の方針に對して粘膜縫合と筋層縫合とを原則的に別々に行ふべきことを主張した、所が瀨尾教授は「そんな事は自分は二、三十年前に行つた云々」と述べた。これは丁度乃公も『二十年前に既に平壓開胸術を行つた云々』と述べたのと同一の筆法である。二三十年前に行つたと言ひながら今日は最早それを行つて居らず矢張り斷端の全層を金屬線で結節縫合する方針を述べて居るのであるから二、三十年前に行つたと言ふのは結局『私は二、三十年前から今日まで何等の學術的根據も認識も無しにたゞ「ボンヤリ」胃を縫つて居ります』と自白したものである。又縫合法を云々するに際して組織的の研索も無く大澤助教授からの組織的檢索を示せと云ふ討論に對して徒らに他事を云ひ論點を回避せんとした見苦しい態度は非常に目立つて居た、何故に此縫合法の優るかと云ふ事を論ずるには大澤助教授が先年の學會で發表した様に組織標本の上で證明しなければなるまい。

### 39. 胃癌の體質的検査の意義に關する臨床的竝に實驗的研究

金澤醫大 石川外科 橘 亮 吉

演者の言ふ痛發生と體質との關係、夫れは無論あるかも知れぬし又あるでもあろう。が要するに之は大問題である。演者の實驗例數は頗る貧弱で此の様なものを持ち出すのは早過ぎる。半分蟲が喰つて居るかも知れぬ様な未熟の澁柿を賣り出した様なもので却つて店の信用を悪くする基である。濱田君の苦言は頗る肯綮に當つて居る。

#### 47. 平壓開胸術の下に行はれたる肺核結の手術的療法に就て

京府大 横田外科 横 矢 田 浩 吉  
栗 生 貝 薫 穆

昨年に引續いての發表で其成績にも相當見るべきもの、ある事を喜ぶ。平壓開胸術を局所麻醉法の下で行つた症例は從來吾國でほつほつ記載せられて居り山法師も數例の経験があるがそれに就ては演者と全然同じ感想を抱くものである。但し演者の行つて居る術式中肋間動靜脈（實際上には肋間神経をも含むことがある）の結紮は術式の一部としては必らずしも必要では無く成るべくならば避けた方がよからう。又、横隔膜神経の切断も出來得べくんば差控へ其代りに一時的壓挫法を採用したらどうかと思ふ。尤も一部に於て壓挫せられた神経が果してどれ位の期間で機能を恢復するかは今後の研究題目ではあるが、治療法の理想たる *Sanatio ad integrum* から言て永久に横隔膜半部を廢用に歸せしむるに忍びない氣がする。尙演者矢田貝君は餘りに能辯過ぎて一々の言語を聞き分けるのに骨が折れた。今少し悠くりと明瞭に話せるやう平素から練習して欲しいものである。折角の立派な業績に對してあれでは誠に惜しい。

#### 48. 胸部交感神経節状索切除術に就て

京都市大外科 大 澤 達

交感神経外科に多大の貢獻をもつ演者は今又胸部交感神経節状索切除術に成功して更に其の適應範圍を擴大したことは日本外科学の爲、慶賀すべき事である。今後50年位経過してから今日の田代名譽教授や或は近藤名譽教授に匹敵する様な元老が「日本外科学發達の回顧」を眞面目にそして忠實に講演することがありとしたならば大澤君の此の手術等などは黙過され得ぬもの、一つであらう。小澤君の討論によると數年前外國で肺結核に對して此手術を行つたものがあるとの事だが吾國ではそれと無關係に無論最初のものであるので異常の興味を以て傾聴せられた。

腰薦交感神経節状索切除術の下肢血行に對する効果から考へても此手術が上肢の諸種脱疽に卓効あるべきことは想像に難くない。そして實際にそれが證明されて居る。然しそれよりも一層吾人の興味を惹くものは、胃、十二指腸潰瘍に對して果して如何なる効果を現はすかの問題である。今後の研究發表が待たれる。尙、此手術は肺結核の治療には恐らく無効なるべしとの假想の下に、京都府大の諸君から討論があり、小澤、大澤兩君がこれに

應答した。時日を藉し患者を與へて澤山經驗を積ませる事は其個人の爲ではなくて結局日本外科學の爲である。

此次に阪大小澤外科からの横隔膜神經捻除術の經驗に就いての演説があつて討論に入つたが岡大の榊原君は肺結核に對して所謂胸廓成形術だの横隔膜神經捻除術だのを行ふ事よりも結核性腹膜炎に對する外科的療法と同じ原則で手術すべきを主張した。これは同氏が昨年の外科學會でも述べたことである。次で鳥瀆教授も起つて『肺結核の外科的療法と言ふ標題の下で肺を廢用に歸せしむる様な外國から輸入した各種の手術を高唱することは慎むべきである。此の如き手術は肺結核の療法と言ふべきよりも肺空洞や氣管支擴張等に對する療法の一つであつて四肢の切斷離斷に比すべきもので其の手術自信は整正治癒を目的とする吾人治療の原則に一致せぬものである。この様な事で外科的に肺結核を治癒せしむ等揚言するのは考へものである。平壓開胸術が樂に出来るのであるから肺結核に對しても結核性腹膜炎に對して從來行はれ來つた外科的治療法に則りて手術を試むべきである』と附加せられた。此の後で石川昇教授が發言せられたが『辯舌はうまいものだなあ』と思はせた以外に山法師の腦裏には何物も残り止まらなかつた。

56. 四肢脱疽患者の動脈レ線像に就て、特に其側副血行枝に就いて

齋藤 眞格  
 神川 一  
 柳澤 秀吉  
 愛知醫大 齋藤外科

昨年來演者等の創案になる動脈レ線撮影劑（「ロンブル」）を應用して諸種脱疽に於ける側副血行枝の状態を検索したもので撮影の鮮かなことでは天下一品の贅辭を捧げるに躊躇しない、實に此方面に於ての貴重な新知見である。演者の不斷の熱心と努力とに依つて續々此新しい領域が開拓されて行くことは實に悦ばしいことである。

併し知つて居らねばならぬことは「ロンブル」は「リピヨドール」から脱化したものでそして血管撮影は此の「リピヨドール」の應用で既に佛國で行はれ此の撮影によりて(甲)閉塞性動脈内膜炎による脱疽と(乙)動脈栓塞による脱疽とが明白に鑑別され其の閉塞部位や副血行の發生狀態なども研究されて居つたことである。例へば J. A. Sicard et J. Forestier, Diagonostic et Thérapentique par le Lipiodol, Masson 1928, p. 244 245, Fig. 42 (I) (II) を参照せられると撮影された血管の鮮明な圖が載つて居る。副血行の發生も證明されて居るし voie rétrograde の撮影法も掲げてある。『血管撮影劑を改良したこと』と『血管撮影方法を創案し成功したこととは無論それぞれ一つの異りたる事項として區別されねばならぬ。これによりて然し齋藤教授の努力に對する尊敬は少しも狭められるものではない。

57. 特發脱疽の腰薦部X線深部照射療法 (續報)

中田 瑞穂  
 唐津 英作  
 新潟醫大外科



特發脱疽に對して出来るだけ非觀血的療法で行かうと云ふ演者の主張には山法師も全然賛成で此原則は單り特發脱疽にのみと言はず一切の外科的疾を治療するに當つて常に必ず則るべきものであらうと考へる。ただ切らう切らうとばかり考へることは決して賞むべきことではない、陸海軍の目的は戦争に非ずして平和である、外科の目的も亦然り。併し陸海軍の本領は戦闘の研究であり外科の本領亦然りと先年の會長演説で述べられた鳥瀉教授の言大いに味ふべきである。それ故に餘りに切らぬ方針を固執しすぎる事だけは嚴に慎まねばならぬ。

山法師は演者が現に良好の成績を収めつゝある事實を甚だ愉快に思ふと同時に、演説の論旨が極めて透徹で、態度も公明且つ謙讓で、それで居て些事を忽にせず聽衆の總てに對して眞に朗な感を與へ得たことを特筆するものである。又此に對する討論者長大神部助教授の態度も演者の此美德に酬ゆるの用意があつたことは十分に觀取された。

近來動もすれば、一方に於て投機的、犬棒式着想の下に實驗成績を殊更に誇張するかと思はれる演説がちらほら隱見し、他方に於ては賣名的揚足取に没頭するかの如き討論がボツボツ擡頭して來た感がある中に模範的の演説振りと模範的の討論振りとを示したことは實に氣持がよかつた。此様な人々となら山法師もすぐ兄弟分になりたい。此の演説に向つての討論者京都府大の濱田氏は、神經の組織學的検査を述べて居つたに對して愛大の齋藤教授は小癩に障つたらしき口調で『神經を染色した結果なんかは餘程注意せぬといけぬ云々』と言ふ様な一般的討論をしたが再び濱田氏から「齋藤教授はどんな神經染色をなされたか」との質問が飛んで來た。齋藤教授黙すること多時ビルショウスキーだけ出て來た。尤も濱田と云ふ人が何でもかでも神經染色唯一點張りで決論しようとするのは不可であつて以後餘程注意す可きであらふ。此時大澤助教授が「此X線照射時流血量増加の本態に關する問題を決定するには唯交感神經のみを考慮したのでは手落である、血管擴張神經のことも考ふべきである」とて京都帝大の教室で行つて居る生理的實驗結果の一端を發表したのは注目を惹いた。

### 宿題 輸 血

愛知醫大 桐原 眞一

演者多年の蘊蓄を傾けた大報告である。輸血の臨床的應用に關しては殆んど間然する所の無い程行届いたもので宿題擔當者としての責は十二分に果されたと言てよからう。外科學會は眞底から敬意を表し心底から感謝する次第である。

報告者は悠揚迫らず演説用語の平易簡明なことや聲量の配り方の巧なことなど三時間以上の講演でも餘裕綽々近來稀なる講演である。それから表に布を用ひたこと、一人の演説者と四人の表係との呼吸のピッタリと合つて居たことなど細心な用意の程が窺はれた。

茲に見遇してならぬ事は愛知醫大外科の兩教室が平素から渾然一家の如くに融和し互に

切瑳琢磨して居る點で、此宿題の研究に當つても兩教室員が擧て此に協力して居る。此の如きは吾國の大學中でも僅に二、三指を屈するに過ぎまいが、教室が年々何かしら手應へのある業績を發表しつつあるのも畢竟人の和が其一半の基をなして居るであらう。立派な外科教授を得て居ることに對し愛知醫大を祝福せぬ譯にはゆかぬ。

宿題に就いて法師望蜀の欲を言へば、輸血効果の本態に關する研究をも加へてほしかつた。例へば、

1. 輸血の各種臨床的効果は血液中の血清にあるのか血球にあるか或は又全體としての血液にあるのであるか。

2. 輸血後の反應症狀の本態は何か、之を起すものは血液のどの成分であるか。

これが研究されると種々なる疾患に向つて治療的に輸血するに際し是非とも「血液」それ自身で無ければならぬか或は豫め貯藏してある『人血清』でも同様の効果は擧らぬかが判り、場合によれば今後『人血清』の「アンブルレ」入りを用意することになるかも知れぬ。

如何に健康な人の血液でも血中にはいつも種々なものが侵入し得るものである、そして血中へ侵入した有害なもの（毒物でも微生物でも）は或特殊のもの（「マラリヤ」）を除く他は多くは白血球中に喰燼されて居るし且つ血中での有核細胞はこれだけで而して核の成分が吸収されると不快作用を起すものであるから血液を遠心して白血球層だけを取り除いたならば或は輸血に原因する不快作用が大に輕減されるかも知れぬ。こんなことは實用上に或は迂遠かも知れぬ。併し研究としては必要であらう。

此の報告のある前に會長は追加討論をやらせてしまつた。がこれはあとで活動寫眞があるのでその都合上止むを得なかつたのかも知れぬが今後は矢張り宿題報告がすんでから追加討論を十分にやらせてそれがすんでから報告者が終結辭を述べて終りにするといふ段取りにしてほしい。

## 學 會 の 結 尾

本年の學會では學會終了結尾の光景が非常によかつた。宿題報告がすむと會長は報告者桐原教授に學會を代表して公式に謝辭を述べ、また本年からきまつた三宅獎學金を其場で壇上で手交した。會衆は拍手して敬意を表した。これは併し『御褒美として下さつた賞與』の意味でなくて、宿題報告の爲に多大の研究的努力を拂つた事に對し『研究費の一部として學會から呈上した』といふ意味でありたい。『賞與』といふのはあまりに學術及び學者に對して敬意を失つて居る様な氣がする。

それがすむと會長は閉會の辭を述べ、日本外科學會の萬歳を三唱し會衆亦た之に和した。それがすむと禮儀に馴れて居らぬ會衆の一部は退散し様として會場がドヤドヤし出した。

それを制して三宅名譽教授が起立し、今度は會員を代表して會長連日の勞に對し感謝の意を表した。それで第三十二回日本外科學會は終了した。此時會長の萬歳を唱へなかつた様であつたが、これは明年から一つの慣例的禮儀として誰か唱へた方がよからふ。

茲で山法師は今後學會を如何様に導き、如何様に改良進歩させるかに就て二、三の希望を述べて綠陰深き處山堂へ立ち戻らふと思ふ。

1. 一宿題の選定方法や報告者の決定には十分の注意を拂ひ大體天馳使の述べた様な意見を採用する事。
2. 評議員は學會の健全なる發展の爲に今後はモット骨を折り考へを練り、意見を交換すべき事。
3. 純學術的演說の中間へ緊張を緩和する意味で外科に關する昔話とか、經驗談とか、失敗談とか誤診談とかを二十分間位老大家にやつて貰ふ事、或は醫師に必要な法律の話などもやつて貰ふ事は忌むべきに非ざる事。
4. 問題以外の討論、發言例へば（大澤氏に對する瀨尾氏の如き）に對しては會長は即時注意を促し發言を差し止むる事。禮を失したる態度及び發言を取てする者亦然り。
5. 具體的に指摘するに非ずして一般的に検査手技を非難するが如きは違法の討論にして討論者の恥辱なりと心得べき事。
6. 必要なくして座長席を退き學會の主宰を他人に依頼するが如きは無責任にして會長の資格無き者と心得可き事。
7. 教職に在り教室を主宰するが如き人々は努力して學會へ出席すべき事、是れ吾等の義務なりと心得可き事。
8. 學會最終日にはなるべく多數出席して終結の儀式を盛んにすることは學會を重んじ會長を敬する所以で、それが即ち學者の道なりと心得可き事。
9. 學會は聞きつ放しにせずして各大學外科教室にて各々批判を發表すべき事、これが即ち進歩向上の爲の大切な仕事なりと自覺すべき事。

我が京大外科が年々歳々必ず外科學會の記事を發表して今日に及んで居るのは、單に其の時々の思ひつきで面白半分の閑文字を弄して居る譯では無く、これこそ即ち斯道の進歩向上に資する一つの方法であると自覺して、義務の觀念に驅られて進んで努力實行し來つて居る次第である事は大方の識者にはよく判るであらふ。(完)

## 京大新學士の教室入局式

本年京大卒業新學士の中でかねてから京大外科教室へ這入りたいといふ希望が鳥瀉、磯部兩教授の許へ申出でられて居つたが詮衡の結果いよいよそれが許可されて昭和六年三月二十七日午前十一時半兩教授が外科圖書室で此等の諸子へ接見する事になつた、此時參集新學士は左記の拾名であつた。

石野琢二郎、裕文雄、弘重充、姫井淑、鳥袋常久、岡本新一、山本彦八、高安彰、宇田和雄、加藤虎之助。

そこで鳥瀉、磯部兩教授が整列して居る新學士諸君の二、三尺前の中央へ進み出で前以て差出されてあつた名簿に従ひ名前と本人とを引き合せ一々挨拶された。それから鳥瀉教授は大要下の様な心得方を述べられた。

此の外科學教室を預つて居る吾々兩人が相談の結果今度諸君を新たに教室員として採用する事に決定しましたので諸君は本日只今から教室の人であります。併し普通よく言はれて居る様に諸君は大學の學生の延長として當然の權利で今や外科教室へ這入つて來たのでは有りません。

入學試験に及第し大學生となればその大學で教育を受ける權利がありまた教授はその國家的職責として『定められた課程』に従ひ諸君を教育する義務があつたのですが大學を卒業して仕舞へばそれで事済みであります。

本日諸君が外科學を専攻したい希望で教室へ入る事を許されたのは大學とは全く別問題で従て決して國家が許可したのではなくてただ吾々兩名が吾々限りで許可したのであります。此の意味で此の教室は一種の私塾の様なものと御心得下さい。

愈々教室で稽古を始める様になればまた更に種々な注意も致しますが今日は諸君が教室員となつた第一日で教室の主長との初對面の日でありますから教室といふものに對して前に述べた様な概念を持つ様に心の準備をして下さい。

それから此の教室では先代の猪子、伊藤兩教授が相談された結果として甲なり乙なり何れかのある個人の教室といふ事ではなく單に京大外科學教室となつて居り、吾々兩人もそれに従て今日に至つて居りますから諸君も個人的固有詞に支配されずただ京大外科學教室員といふ立場に在る事を忘れぬ様にして下さい。そればかりではなく此の教室は整形外科學教室とも密接の連結があり外科學教室員は一度は必ず整形外科學教室員ともなるべき事に定めてありますから、これも前以て御承知置き下さい。

これで鳥瀉教授の挨拶がすみたり、時恰も別項所報の如く外科教室の助教授、講師、助手全部が同時に外科圖書室の他の一隅に居り合せたるにつき鳥瀉教授は更に新學士諸君に對し次の如く述べられたり。

『丁度此處に現在教室の中堅となつて居る諸君の先輩が居りますが此の機會に新入諸君は此等の先輩を見識り挨拶をして置くがよいと思ひます』。

これが終つて兩教授先づ退出せられ、それから各自挨拶を交換して一同退出した。

## 京大外科學教室の新助手決定

昭和六年三月二十八日、鳥瀉、磯部兩教授の命で外科教室の助教授、講師、助手が外科圖書室へ招集された。

勿論何の用向きであるのかは誰も知らぬ。

出席者は左の通りであつた。

大澤助教授、塚原助教授、由茅講師、青柳講師、巽講師、寺内講師、猪木講師、山根助手、赤木助手、藤浪助手。

午前十一時半鳥瀉、磯部兩教授が來られて鳥瀉教授から左の様な申付があつた。

『今回神部助手が長崎醫大外科助教授に榮進し助手の位置が一つ空きましたからその候補者を諸君で無記名投票して下さい、但しこれは前例もある通りただ吾々兩人の教授の参考の爲であつて最大票數を得た人がその儘直ちに助手として採用されねばならぬと言ふ原則からでは有りませんから申添へて置きます』

開票の結果は次の通りなりき。

福間副手 七 票      鬼束副手 二 票      岡 副手 一 票

鳥瀉教授から「諸君これで用事が済みましたから」とありて一同退散したり。兩教授は連れ立ちて磯部教授室に入られたり。

少時にして大澤助教授が兩教授の許に呼ばれ福間三徳氏を新たに助手とする事に決定せし故その手續を取る可き様命ぜられたり。助手、講師、助教授などは所謂天下の公器であるによつて教室内で衆望の歸して居る者が推舉される様に道が開かれてゐる事は實に頼母しい事と言はねばならぬ。